新書紹介

路上観察学入門

赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊・編
筑摩書房　B6判　三一六頁　一、六〇〇円

この本の背に三人の編者の名前がある。赤瀬川原平、藤森照信、南伸坊である。そうこの本はそのスジの本なのである。そのスジとはいわば〝面白主義〟とかいう奴だ。赤瀬川は芥川賞作家尾辻克彦の別名であり、美術家としても読売アンデパンダン展出品の「模造千円札」や街頭で展開した「東京ミキサー計画」という名称のイベント活動で六〇年代センセーショナルにデビューした。南伸坊の師でもある。

南はイラストライター（イラスト＋エッセイを書くからこう呼ぶ）と称し、その軽妙な語り口は若者にウケている。最近はあのユニークな顔をテレビでよく見かけたりもする。この二人は〝面白主義〟の代表格である。して、本書は〝面白主義〟啓蒙の書なのである。〝面白主義〟とは、公明正大な偏狭な考え方・見方であり特定の個人にのみかかわる過度の好意的こだわりと友好的態度、といった具合にひとまず理解したい。

もう一人の編者藤森照信。彼は東京建築探偵団と称する学術集団で東京周辺の西洋館（学術的には明治初期から昭和戦前までに建てられた近代建築をいう）を十数年間も追い求める建築史家であり、方法にこだわる学者でもある。この本は、藤森の学問の方法の援用として貫かれている。「路上観察＝フィールドワーク」がそれである。本書の構造を大ザッパに言えば、偏狭的面白主義者たちを「路上観察学」といった方法の学問で救い出す。つまり意味付けを行うといったものだ。

一部は赤瀬川原平の芸術へのザンゲ、藤森照信の「路上観察学」樹立のための基調報告、二部は藤森の基調報告を肉付けするように編者三人の座談会が展開される。三部では偏狭的面白主義者たち八人のフィールドワークのノウハウを開陳している。四部は路上観察学と同種のまなざしを発する博物学的視点で、評論家四方田丈彦ら三人がモノの見方、こだわりを展開している。

さて本書は〝面白主義〟啓蒙の書であり、「路上観察学」樹立により偏狭的面白主義者たち救済の書である。〝面白主義者〟については三部の「私のフィールドノート」の項に具体的にある。一体何を観察しているのかを見ると、およそ世間一般では？マークをつけられてしまいそうなモノばかりだ。赤瀬川原平はじめトマソン観測センターによるトマソン物件の捜索。トマソンとは巨人軍初の助っ人外人トマソンを語源とし、その活躍から、無用の長物の意味であり、ここでは建築物またはそれに付随する無用の長物オモシロ物件なのである。また藤森照信・堀勇良など東京建築探偵団の西洋館探し、林丈二のマンホールのフタ採集、森伸之のセーラー服観察、一木努の建物のカケラ採集などのフィールドワークのノウハウが開陳されている。

ちなみに南伸坊のジャンルはハリガミ観察である。これらの研究の成果はそれぞれ本にまとめられ出版されている。森伸之のように「世の中には『制服を着ている女子高校生』が好きな人もいれば『女子高校生が着ている制服』が好きな人もいる」といった、自分は断じて変態ではないとの弁明も加わったものもある。実にマニアックな世界である。しかもそれは実に個人的なもので、その視点・感覚のかたよりに妙な面白さを覚えてしまう。

ところで厳密に言えば〝面白主義者〟は赤瀬川と南の二人である。彼らは「これは面白いのだ！」と認識している面白主義の確信犯（？）とも言うべきで、認識しているがゆえに下向きではなく他人に対し啓蒙的になってしまうのだ。

一部で藤森は既成のアカデミズムを批判しつつ「路上観察学」の樹立を試みる。そして「路上観察」の概念を四つの〝まなざし〟から提唱する。「紙上→路上」「観賞→観察」「大人の芸術→子供の科学」「空間→物件」と。いわば「生活者のまなざし」＝椎名誠いわく「半径二百mの視点」なのである。

おわりに突然啓蒙的になるのだが…ここで意味をもつのは、現場感覚と好奇心である。街をよく見ろ！とはいわずもがなのことではあるが、公務員界を震憾させる〝タコツボシンドローム〟治療薬として、元気がでる好奇心マニュアルの本書は役立つと思うのだが。

＜市民局婦人行政推進室　吉仲一也＞